

第一部 縁起

第一部 縁起

第一章

一晩じゅう降りつづいた豪雨が、昼時分になるとやんだ。クアール社の頭目バヤリンは家のなかから顔をのぞかせると、雨がやんで、金色の太陽の光が厚い雲間から射していることに気がついた。ようやくいい塩梅あんばいの天気の後になつた。

バヤリンは嬉しくてしかたがなかつた。大雨がやむと、必ず餌を求めて大きな動物が出てくるのだ。彼は部落の若い連中を七、八人集め、部落の裏山の谷に行く準備をした。イノシシかヤギをしとめたかつたが、最上なのはシカをしとめることだつた。

彼はからだを伸ばすと、雨後の空気を大きく吸いこんだ。雨はやんだが、風はまだきつかつた。海から吹き寄せてくる風には塩辛い海水の味がした。

バヤリンはなにげなく山の麓の海岸を見ると、思わず目を見開き、大きな声で叫んだ。みなもバヤリンが見る方向に目

をやつた。海岸には、いまにも上陸しようとする二艘の船がかすかに見えた。船には移動する人影が見え、白い服が明るい太陽のもとでひとときキラキラと輝いていた。

「敵が侵入してきたぞー！」

バヤリンはなんの疑いもたず、つづけて五回、サシバ（タカ科）の鳴き声を発した。これはクアール社の頭目の人々を呼び寄せるときの合図だ。しばらくすると、二十人ほどの勇士が番刀や投げ槍、弓矢、火縄銃を持ち、次々と集まつてきた。異様な情況のために女たちも三人駆けつけた。バヤリンが腕をひと振りすると、みなは山の麓に向かって飛ぶように走つていった。

部落から山の麓までは、一面、相思樹の密林で、海の近くはアダンの茂みだつた。岸辺の人影はしだいにはつきりしてきて、奇妙な服を着た連中は金髪か紅毛だつた。みなはほとんど同時に、先祖から伝わる昔の事を思い出していた。ずっと昔、彼らの部落は紅毛人（オランダ人）のやつらに襲われたことがあつた。そいつらの火縄銃は強力で、遠距離から人を殺すことができた。来たのは二十人足らずだつたが、百人に近い部落の人が殺され、わずか五人だけが幸いにも身を隠して生き残つた。紅毛人が去ると、彼らはようやく出てきて

再建に取り組んだ。ずいぶん年月がたつて、クアール社はようやく旧觀を取りもどしたが、しかしこの血の深い恨みは永遠に記憶されることになった。

バヤリンは岸辺の十数人の人影をじつくり觀察し、彼らは紅毛人に間違いないと確信すると、にわかには胸中に熱い血がわき起こった。こんなに長く時間がたつてから、紅毛人がまた侵入してくるとは思いもよらなかつたが、幸い祖靈のご加護のお蔭で、発見が早かつた。

「祖靈が天上で、クアールをわれらが防衛するのを見守つてくださっている。紅毛人に再びやりたい放題にさせるわけにはいかぬぞ」

バヤリンは手に汗を握っていた。

バヤリンら二十人あまりは山の麓に着くと、注意深く、まづ林のうしろに身を隠しようすを伺つた。その十人あまりのよそ者は、少なくとも三、四人は紅毛人に間違いないが、ほかの者は黒髪で、着ている物もかなり違つていた。彼らはひどく疲れているようすで、座り込んだり、倒れ込んだり、起きあがつて歩くときには、足を引きずるようにのろのろと動いた。何人かは服を脱ぎ、紅毛で毛むくじやらの胸をさらけだしていた。

紅毛人は憎むべきかつ恐るべき相手であり、紅毛人と一緒にいるやつも当然みな敵だ。バヤリンはひと声大声で叫ぶと、火繩銃で第一撃を放つた。ほかの者もつづいて鬨こゑの声をあげ、いっせいに銃を撃つたり、弓矢を射たり、投げやりを投げた

りした。海岸にいるよそ者は、ふたり倒れた。ほかの者も叫び声をあげて散らばりながら、海辺のアダンの茂みに向かって走つた。

彼らは疲れ切っていたのか、走るのが遅かつた。バヤリンはすぐに水夫服を着た、瘦せて背の高い紅毛人に追いついたが、この紅毛人はバヤリンよりも頭ふたつ分背が高かつた。バヤリンは飛びかかつて紅毛人を突き倒した。バヤリンはこの紅毛人を生け捕りにしようとして手を伸ばしてその襟をつかんだ。すると、そいつは思いもよらない反応で、バヤリンの手を力いっぱい噛んだのだ。バヤリンがあまりの痛さに悲鳴をあげると、そばにいたふたりの弟が急いで助けに入つて一緒に紅毛人を抑えつけた。紅毛人は大きな悲鳴をあげたが、その声は女のようにだつた。バヤリンが止める間もなく、弟がすばやく刀を抜くと、そいつの頭を切り落とした。そのとき、まわりではあいついで叫び声があがっていた。侵入者をみな

第一部 縁起

やつつけたのだ。

バイリンは紅毛人の死体をひっくり返した。そいつは水夫服を着ていたが、キラキラ光る玉が象嵌されたきれいな首飾りをしていた。首を切りおとした弟がその頭をぶらさげると、あごにはひげがなく、長髪がたれさがった。三人は愕然としてなにも言わず、首をはねた興奮が突然凍りついた。この男の水夫服を着ている紅毛人は女だったのだ。部落の伝統では女を殺さない。女を殺しても勇士と言われないからだ。巫師は、女を殺すと呪われると言っていた。バイリンは背筋に悪寒が走り、弟は頭を海辺に捨てた。ただ、大声で歓声をあげているみなに対しては、彼ら三人は作り笑いをした。バイリンらは、帰つたらすぐに部落の巫師に頼んで儀式をしてもらうことにした。祖霊に報告し、紅毛人を殺して撃退した功勞に免じて、女を誤って殺したことを祖霊に許しを乞うのだ。バイリンは弟を引き連れて紅毛と黒髪の首をいくつつか引つさげて、すぐに山に帰った。あの女の紅毛の首は砂浜に捨てたままにした。大地は静けさを取りもどし、波がひとしきり岸に打ちつけ、岩礁にぶつかっている。波のくだける音は、まるで挽歌のように高く響いた。砂浜には血痕が点々と残っていた。死体、衣服、それに二艘の空のサンパンが残り、惨

劇のあとが広がっていた。

夕陽はまるでこの惨状を見るに忍びないように、海に沈んでいった。

*

月光が地面一面に降りそそいでいる。夜半、ひとりの人影が、アダンの茂みからゆつくりと這い出て、全身を怒りに震わせながら、地上に座りこんだ……長く、いつまでも。

とうとう人影は立ちあがり、月光のなかに消えていった。

第二章

テイモエ アフキツ
蝶妹と文杰の姉弟ふたりは、父の新しい墓に線香をかかけ三回拝礼をしたあと、三跪九叩頭の礼をすると、父に別れを告げた。

「林兄さん……」

ミア
棉仔も線香をあげて参拝するところ言つた。

「兄さんはずもとおれらに会いに社寮（いまの屏東射寮）に来るはずだったけど、おれのほうが統領埔（いまの統領埔）

に来ちまった。安心してくれ、文杰と蝶妹はおれが社寮に連れて帰るよ。安心してくれ！」

小雨がどんよりした空からさらさらとこぼれ落ちてきた。

秋風が傀儡山から吹きおろし、統領埔の荒野をかすめていった。

ヒューヒューと吹く風の音が、ゴーゴーと流れる瑯嶠溪（いまの四重溪）の水の音にまじり、棉仔はさびしい気持ちに襲われた。

まわりを見渡すと、瑯嶠溪の下流にある三、四戸の新しい移民の家と、瑯嶠溪の上流に石門山と蝨母山が望めるだけだった。棉仔には、さらに行けば凶暴な傀儡番の天下だと知っていた。「よくもまあ林兄さんはこんな辺鄙なところに、二十年も住めたもんだ！」

棉仔は墓前に何本かの線香を挿すと、供え物をかたづけ、まだぶつぶつと父親に別れを告げている姉弟に言った。「もういいだろう、蝶妹、文杰、もう行こう」

蝶妹と文杰は、なお墓のまえに立って手を合わせたまま離れようとせず、ぶつぶつと父親に訴え続けていた。

雨が強まって、蝶妹の髪が少し濡れているのを目にすると、松仔はそばに近づいて、合掌して黙禱している蝶妹に傘をさ

しかけた。

蝶妹は松仔に感謝の目を向け、それから棉仔のほうをふりかえって言った。「棉仔兄さん、イナ（バイワン語で「母親」の意味）にもお別れを言ってから行くわ」

今度は、蝶妹と文杰は線香を持たなかった。ふたりは家のなかに入っていった。家に入ると、正面の広間の隅に大きな石板が一枚あり、まわりより少し高くなっていた。蝶妹は用意しておいたビンロウの皿と花を石板のまえに置いた。姉弟がいましゃべっているのは生番のことばだった。棉仔と松仔ははつとした。そうだ、姉弟ふたりの母親は傀儡番の風習で、屋内に埋葬されているのだ。

棉仔はフツとため息をついた。と言うのも、これでは唐山（中国大陸）からの移民がこの家を受けつぐことはあり得ないからだった。彼は思った。「客家のこの林兄さんは、傀儡番を女房にしたために、本当に多くを犠牲にした、なかなかできないことだ」

こうして姉弟は荷物をさげ、そば降る雨のなかを棉仔と松仔の兄弟について、統領埔を離れた。彼らは巨石が横たわる瑯嶠溪を渡りおえると、また幼いころから住んでいた小さな家をふりかえり、いつまでも名残惜しさを断ちきれないよう

第一部 縁起

すだった。ようやくふたりは心を決めると、歩みを早めて棉仔に追いつき、西南の方向に歩いていった。彼らの目的地は棉仔と松仔が住んでいる社寮である。社寮は土生仔トウサンア、つまり平埔族の大きな部落だ。棉仔と松仔の父は社寮の首領だった。

第三章

ルジャンドルが目をあけると、周囲は真つ暗で、太陽も山に沈んでいた。午後いつぱいずっと眠っていたのだ。

彼はいましたが、またクララの夢を見ていた。ため息をつくとき、さらに十分あまりベッドに横になってからようやく起きあがった。この女には、本当に愛と恨みを抱いていた。十数年来、ずっと彼女を深く愛し、彼女のためにアメリカに移住し、フランスを離れた。しかし、彼女は、彼が彼女の国のために戦って負傷すると、彼を裏切ったのだ。

これ以上耐えたいことはない。

彼は努力に努力を重ね、さらに生命の危険を冒してまで、自分のために忠誠心に満ちた英雄像を造りあげ、彼女が夫を誇りに思うように望んできた。払った代償は小さくなかったが、成功したと言えるだろう。しかし、彼女の裏切りは、彼

を徹底的に打ちのめした。

こうして、彼は傷ついた心をなだめるために、厦門アモイというまったく未知の東洋世界にやってきた。

彼は灯あかりをつけ、書齋兼事務室に入っていった。テーブルのうえには新しい書類が並べられていた。

厦門に来てから三か月あまりがたった。彼は精一杯仕事をしながら、新しい人生の舞台が見つかるように願っていた。

ルジャンドルの辞令は、実は去年の夏、一八六六年七月十三日に出ていた。彼のためにこの職位を準備したのは、彼の上司で南北戦争「二八六一―六五年」の英雄グラント將軍だった。將軍はニコニコ笑いながら彼に言った。「チャールズ、厦門島は風景がいらいらしいぞ、気候も温暖だと聞くよ。この『駐大清国米國厦門総領事』は、一八六〇年の北京条約後におかれた新しい職位だ。ご息を連れて赴任して、神秘的な東洋の中国に遊びながら、傷を癒されるとよい。十分に静養できたら、余がまた良い仕事を手配しよう」

將軍が言う傷を癒すとは肉体的なものだった。彼は南北戦争中に多くの戦役を経験した。いつも命知らずの猛攻撃をかけて敵を陥れ、何度も負傷していた。だから時期を早めて除隊したにもかかわらず、勲章を授与され准将となった。「ル

ジャンドル將軍」という肩書きは、片目と碎かれた下顎、さらに折られた鼻柱、そしてからだに残るいくつもの傷あとと交換に得たものだった。

しかし、彼の碎かれた心はどのようにして「傷を癒」せばよいのだろうか。

彼は二年まえの、一八六五年三月十二日をふりかえった。戦争はまだ終わっていないかったが、グランド將軍が自らジャンドルの准将叙勲式に出席し、彼が可愛がっているこの將軍の五年来の英雄的な戦績を次のように紹介した。

一八六一年十月二十日、チャールズは自ら従軍を志願したのであります。チャールズの努力がなければ、ニューヨーク第五十一歩兵団は設立できなかったでありましょう。このうち、歩兵団は輝かしい戦功をあげ、チャールズ・リゼンドル（シャルル・ルジャンドルの英語による発音）少佐は多くの貢献をなされたのであります。

一八六二年二月、チャールズはノースカロライナ州ロアノーク島攻略の戦いで戦功をあげました。その功績ははなはだ偉大なものです。

その一か月後には、ノースカロライナ州のニューバーンの

戦いで、チャールズはまた大きな戦功をあげました。ただし、下顎に英雄を象徴する銃弾の痕が残ったのであります。彼は重傷を負いながらも屹立^{きつりつ}して倒れることはありませんでした。人々に尊敬される鉄の男であります。

その年の九月、チャールズは中佐に昇進しました。

わずか半年後、一八六三年三月十四日には、チャールズはさらに大佐に昇進し、第五十一歩兵団団長を兼任して、我が第九軍団の主力部隊になったのであります。

かくして、余は幸いにも直接チャールズを率いることができたのであります。

一八六四年五月、有名なバージニア州における荒野の戦いがありました。この戦役はすでに歴史に残る戦いとなっております。両軍は三日にわたって戦いをくりひろげました。戦況は熾烈をきわめ、チャールズ・リゼンドルは再度命がけで戦闘を展開したのであります。一発の弾丸が残酷にも彼の左眼を貫通し、鼻柱を折りましたが、リゼンドルはそれでも倒れることなく、傷を負ったまま軍を指揮し、勇敢に敵の陣営に突撃して、圧倒的な勝利をおさめたのであります。

チャールズの英雄伝奇はまだ終わっておりません。メリーランド州軍事病院で養生していたおりに、南軍の侵攻に遭い、

第一部 縁起

一刻の猶予もならない情勢となったのであります。チャールズは病床より跳ね起きると、南軍に反撃したのであります。彼の満身の傷痕はこの戦役の過酷さを証明しております。チャールズはまた第九軍団募兵処処長に抜擢されたのであります。

チャールズ・リゼンドルは余が生涯で出会った、もつとも勇気と気迫をそなえた軍人であります。

叙勲の壇上では、ルジヤンドルは穏やかに笑みを浮かべていたが、心には血が滴っていた。というのも、一か月まえに、彼はクララの手紙を受け取っていたからだ。クララは、男の子を産んだが、その子は早産のため亡くなったと告げてきたのだ。彼女は心身ともに激しいショックを受けて、療養所で長期療養中だった。

まさに青天の霹靂だった。ルジヤンドルは一八六一年の年末に入隊したあと、一八六二年九月に中佐に昇進したときにニューヨークに帰って、クララとわずか十日ほど一緒にいただけだった。この赤ん坊はもちろん彼の種ではあり得なかった。クララの手紙では、赤ん坊は六週間ほど早く生まれたという。逆算してみると、クララが妊娠したのは、ちょうど彼

が重傷で、メリーランド州軍事病院に入院しているときだった。手紙の内容からみると、クララが出会った男が、この浮気を認めていないのは明らかだった。

彼はほぼ完全に打ちのめされた。戦場でのあの日々、彼は一、二週間ごとにクララとウイリアムに手紙を書き、彼がどんなに妻と息子のことを思っているかを書きつらねた。

なんとという恥辱だ！ 自分が重傷を負って入院していたときに、クララは彼を裏切っていたのだ。彼女は完全に徹底的に彼を裏切っていた。戦場での輝かしい戦功、荣誉ある勲章、そのすべてが完全に意義を失ったのだ。

十数年この方、彼は変わることなくクララに深い愛情を捧げてきた。彼はフランス人であり、家柄もよかった。大学はランス大学とパリ大学を出た。一八五四年、二十四歳のときに、彼はブリュッセルでニューヨークから来ていたクララに出会った。クララは両親についてヨーロッパ旅行にきていたのだ。父のミュロックはニューヨークの有名な弁護士で、両家は家柄、財力ともによくつりあっていた。ただ、ミュロックはこの結婚に、ルジヤンドルが結婚後必ずニューヨークに来て、アメリカ国籍を取得することという条件をつけた。

ルジヤンドルは何事にも全力をつくすたちで、クララを追

いかけることでも言うにおよばずだった。ふたりは一八五四年十月三十一日に結婚すると、ルジャンドルは約束通り、ニューヨークに移住し、帰化してアメリカ公民になった。この年、彼は二十四歳だった。翌年、ふたりのあいだに最初の、そして唯一の愛の結晶、ウイリアムが生まれた。

しかし、結婚後ふたりの感情はうまくかみ合わなかった。弁護士業を営むについては、彼は能力が高く志も大きかったが、ただニューヨークでは人脈も地縁もなく、いつも岳父の影から逃れられず気が晴れなかった。クララはお嬢さん氣質だった。ルジャンドルはもとも男性主義のタイプだったが、ずっと耐えてきた。事業に成功することで、彼女の歓心を買おうと、彼は遠くアメリカ中部まで鉱山の採掘にも出かけた。一八六一年に南北戦争が勃発した。彼は戦場で手柄を立てて名をあげようと望んだ。彼は当代のラファイエット侯爵(アメリカ独立革命とフランス革命で活躍。「両大陸の英雄」と讃えられた)になろうとしたのだ。今回、アメリカ人が戦うのは内戦ではあったが。

クララは彼が軍隊に入ることに反対だった。クララは、彼らは名家の出で、チャールズが従軍して功績をあげる必要など、まったくないと考えていた。いわんや彼はフランスから

来たのであって、なおさらこの戦争に巻き込まれる必要などなかったのだ。従軍の前夜、彼はクララと大喧嘩をした。そのあと従軍中に負傷して独眼竜になった。医者は彼に義眼を入れ、折られた鼻柱を矯正した。彼は手紙のなかでクララに嬉しそうに、まだ顔はつぶされていないからまだだよと書いた。クララは手紙の返事に辛辣に皮肉るように、そうまでなさって將軍の肩書と交換なさる価値がおりになって、と書いてきた。

まったく思いもよらないことに、クララは絶縁してきたのだ!

クララはもちろん彼が除隊したときも叙勲式にもあらわれなかった。彼ももうクララに会いに行くことはなかった。彼はカトリック教徒であったため、クララと離婚しなかった。ただ、クララへの感情はもうもどってくることはなかった。幸い古くからの友人であるハワード・ポッターが、彼に替わってウイリアムの面倒をみてくれた。ウイリアムは十二歳になっていて、両親の結婚がうまくいっていないことをよく理解していたので、ずっとポッターのそばにいた。

ルジャンドルはもともと去年の夏に厦門での任務に就く予定だった。と言うのも、彼の任期は去年の一八六六年七月

第一部 縁起

十三日からだったからだ。彼は中国語教師とウイリアムを連れ、ニューヨークから船に乗ってまずリバプールに行き、それからフランスにもどって母親に会いに行つた。その折、フランスで彼は不注意から転倒して足を折り、やむなく四か月休養することになってしまったのだ。そのため、廈門に来たときには、もう十二月になっていた。

今年一月に、駐北京米国公使アンソン・バーリンゲーム（蒲安臣）が北京の清国総理衙門（清末の外交官庁、恭親王（清朝の咸豊帝の弟）に信任状「本国人姓氏李真得（ルジャンドル）」、名查理（シャルル）」を特派し、廈門領事官に実授する」を捧呈した。領事館は廈門にあつたが、ルジャンドルが管轄する五か所の通商港は、廈門を除いて、ほかの四か所はすべて海峡対岸のフォルモサ（欧米人からの台湾の呼称）にあつた。もともとは淡水と安平だけだったが、のちに鷓籠（いまの基隆と打狗（いまの高雄））が追加された。安平は台湾府（いまの台南市内）の港だつた。台湾府はフォルモサ最大の街だつた。彼はフランスでベッドから動けなかつたとき、フォルモサに關する多くの本を読んだ。安平と台湾府は十七世紀にオランダ東インド会社が開發したところだつた。安平はそのときゼーランジャ市、台湾府はプロビンシャ市と稱していた。彼

の管轄区はヨーロッパと深い繋がりがあつたのだ。このことは大いに彼を奮立たせた。

しかしながら、彼の領事館はフォルモサにはなく、廈門にあつた。彼は今にいたるもフォルモサに足を踏み入れたことはなく、島にあるヨーロッパ人の遺跡を訪ねてはいなかつた。廈門は美しかった。東洋は神秘的だつた。しかし、彼の心は相変らず暗かつた。仕事のうえでは大変努力し、しかも業績をあげていなければならぬ。

彼はどうしたらよいかわからない精神状態だつた。この二か月あまり、仕事は実際のところ外交とは關係がなく、人身売買の追跡が主な仕事となつていた。これは彼が求めているものではなかつた。

彼は外交で正真正銘の実績をあげ、自分の第二の戦場を切り拓きたかつた。積極的に敵陣に突撃してきたように、外交という戦場で往年の奮闘、壮志、覇氣を取りもどすことを望んだ。彼は自信があり、外交でも新しい境地を打ちたてることのできると信じていた。

彼は公文書を開いた。それは自国の船舶ローバー号がフォルモサで事故を起こしたことに關するものだつた。

「これこそ外交問題だ！」

思わずその言葉が口をついて出、右手でテーブルをドンと叩いた。

厦門に来て三か月あまりたった。彼ははじめて挑戦するものを得て奮い立った。

第四章

バヤリンは思い悩んでいた。またひとり死んだのだ。紅毛人の女の首を切りおとしたあの弟だ。ふだんはすばしこくて強靱な男が、ピンロウの木から落ち、しかも頭を大きな石にぶつけて、二度と起きあがることはなかった。本当に思いもよらないことだ。

あの紅毛人の女を誤って殺してから、たった十日のあいだに、部落で死んだ三番目の男だった。

クアール社では最初にふたりの男とひとりの女、そして一匹の犬が死んだ。最初に死んだのはあの異人の女の首を切った男とあの日最初に銃を撃った男だった。女は異人の女から腕輪と首飾りを奪い取った女だった。死んだ黒い犬は、話によると林の茂みで女を探しあて、女を林から追いだしてきた犬だった。ふたりの男はもともと仲の良い友だちだったが、

酒を飲んだあと口論となり、互いの首を切って死んだ。女は海辺に魚釣りにいき、細長い、見たこともない銀白色の大きな魚を釣りあげた。女は最初とても喜んでいたが、不注意にもこの怪魚に指を刺され、数日後には腕全体がただれて死んだ。黒い犬はどんな悪いものを食べたのか、突然口から白い泡を吐いて死んだ。

女巫の話では、あの異人の女の怨恨は非常に激しくて、復讐を誓っているのだということだ。

部落の人々は慌てふためいて、口々にあの紅毛人の女は魔神と化して復讐に来たのだと言った。

女巫は、もし紅毛人の女の首がまだあるのなら、言葉は通じないが、死霊と対話を試みて、怒りを鎮めてくれるように頼めるだろうと言った。しかし、あの日、彼らは女を誤って殺してしまったことを知って驚き、女の首を海辺の砂浜に投げ捨ててしまった。女を殺せば勇者にならないどころか、臆病者で、女をしいたげ、祖霊のタブーを犯したとみなされるからだ。

そこでバヤリンは女巫と小頭目たちを引き連れて、聖なる大尖石山に登り、祖霊のご加護を祈った。

女巫は、祖霊のお告げではだれも間違っておらぬ、こたび

第一部 縁起

はみなは祖霊の敵討ちをしたのじゃと言ひ、そしてこう言つた。昔々のことじゃ、紅毛人の船団が理由もなく部落を焼き、そのうえ部落じゅうの男も女も、老人も幼子もみな打ち殺したのじゃ。祖霊は告げておられる、紅毛人はとても凶悪だった、小さな子供さえ見逃さなかつたと。幸い祖霊のご加護もあつて、あのときは、運よく何人かの男女の若者が谷川に水遊びに行つていて、遊びすぎて帰りが遅くなり、それで襲撃をまぬがれ、部落の血が絶えなかつたのじゃ、ようやくこの度、みなが祖霊のために仇を討つてくれた、祖霊はとても喜んでゐると。さらに、もしこの紅毛人の女魔神に会うことがあつたら、祖霊はこの女に、紅毛人も部落の女をたくさん殺したのだから、これでお互いさまだと言つてやるとのことだった。

バヤリンと部落の勇士は女巫のことを聞いて、祖霊は決して自分たちをお叱りになつていないのだと知つて、大いに喜び、心にあつた大きな石がなくなつたように感じた。

ひとりの勇士がバヤリンに、祖霊のお告げをスカロのトキトク大股頭だいくこうちうにも伝えるべきではないかと言つた。クアール社はスカロに属さないが、ただトキトク大股頭はみなが尊敬しており、大股頭に話しておけば間違ひはない。それに、十人

あまりの紅毛人を殺したこともささいなことではなく、当然大股頭にも知らせておくべきだと言ふのだった。